第 2 回　扁鵲と現代医療

少子高齢社会のわが国の医療において今日最も重要なことはいうまでもなく、緻密な疾病予防対策を講ずることと、質の高い医療を安全に提供することである。わが国の保健医療においては、とくに患者の高い満足度が得られるような医療を効率的に提供することが要求されており、そのような社会的要請に対応して、集検の普及が進むとともに、医療現場においては根拠に基づいた医療（EBM）が重視され、医療安全対策や診療の IT 化なども進行している。

日本学術会議において第 19 期まで続いていた第 7 部（医歯薬）会員を永く務められた橋本嘉幸氏（共立薬科大学理事長・東北大学名誉教授）のご高説を最近拝聴する機会があった。そのなかで、同氏が科学的に治療・予防の効果を評価するための要件について古代中国の医聖身体の機能改善効果が期待され、わが国でもその一部が 1981 年以降健保薬価収載されているが、その欠点のひとつは EBM に乏しいことで、代替医療の範疇にあるものが多いことである。

扁鵲は中国伝統医学のなかで脈学の創始者とされ、その言動に現在の予防医学や EBM の萌芽を微かに感じることができる。史記（小竹文夫・小竹武夫訳：史記 7 列伝 3,第 2 刷,筑摩書房,東京,1999 年）によれば、扁鵲は長桑君という隠者から医術の秘伝を伝授された名医で、当代の諸国をめぐって重病に罹った数々の貴人の治療をしたとされる。扁鵲は「人は病気を早期に予知し、良医について早く治療を受けるならば、病を治し、身を活かすことができるのである。・・・病気には六つの不治がある。驕慢で、道理を無視することが、第一の不治である。身を軽んじ、財を重んずることが、第二の不治である。衣食の妥当でないことが、第三の不治である。陰陽が五臓で合併し、気の不安定なことが、第四の不治である。形容（すがた）まで衰えはてて、薬を受けつけないのが、第五の不治である。巫覡（みこ）のことばを信じて、医者を信じないのが第六の不治である。これらのうち一つでもあれば、すこぶる治療しにくいのである（訳文のまま）。」と述べている。

漢方医学発祥の中国では紀元前 2900 年頃最初の医学書を書いたとされる伏儀以来多くの医聖が出現しているが、扁鵲以外にも現代医学にも通じるようなことを述べたと伝えられる人物は多く、それらの医学の考え方は西洋医学に対して大きく変わるところはない。

いずれにしても、予防医学やEBMにせよ、現代の医療を実践する現場において重要なことは、研究から得られた根拠、患者の要求や好み、医師の経験や専門性などの3つの要素が納得のいくようにバランスよく保たれていることであろう。